＜要旨＞　学校教育部門作品

「ふくおか教育論文」

よりよい生活づくりを楽しむ子どもが育つ学級活動

～思いや願いを膨らませる活動構成を通して～

大牟田市立みなと小学校
教　諭　　千井　あゆみ

こんな手立てによって…

活動Ⅰでの話合い，実践を基に議題化したことを，活動Ⅱで話し合い，実践するという活動構成を仕組み，思いや願いを連続・発展させる。

こんな成果があった！

よりよい学級や学校をつくりたいという意欲をもち，問題を解決できる考えを創り出しながら活動に取り組む子どもたちの姿がみられた。

１　考えた

第２期教育振興基本計画における「自立」「協働」「創造」の三つの理念から，自分たちの生活をよりよくする集団活動に参画し，工夫しながら生活を改善していくことで，主体的に問題を解決していく力を高めることが必要であると感じている。しかしながら，学級や学校生活を自分たちでよりよくしようとする意欲やその方法が高まっていないことが現状である。

そこで，学級活動（１）において，関連した議題からなる活動Ⅰと活動Ⅱを位置付けた活動構成を仕組むことで，生活をよりよくする意欲をもち，問題を解決する考えを見いだして実践することができるようにしたい。それを通し，問題解決の方法を理解したり，自分たちの活動のよさを実感したりし，更に次の問題解決を自発的，自治的にできる子どもを育てたいと考えた。

２　やってみた

事例Ⅰでは，活動Ⅰ「学級の歌の歌詞づくり」→活動Ⅱ「歌い方の工夫」と，内容に深まりをもたせた議題，事例Ⅱでは，活動Ⅰ「学級の体力アップの取組」→活動Ⅱ「スポーツタイムでの下級生との取組」と，対象の広がりをもたせた議題を実践した。活動Ⅰにおいて，グループでつくった考えの問題点を指摘し，改善できる考えを創るという活動過程で話合いや実践を行った。そして，同様の活動過程で，活動Ⅰから議題化した活動Ⅱを行うことで，活動Ⅰでの話合いの仕方や考え方が生かされ，問題を解決できる考えを創り出すことができた。このような積み重ねにより，子どもたちは，学級目標の実現に向かっていることを感じていた。

３　成果があった！

活動Ⅰ，Ⅱでの以下の四つの手立てが，思いや願いを継続・発展させることに有効だった。

議題化する際，写真やアンケートの提示，実践や子どもの思いの価値付けをしたことで，思いや願いを強くして取り組むことができた。また，グループ活動を配置することにより，一人一人が責任をもって役割を果たし，活動の活性化につながった。更に，グループやフリー，全体での話合いをさせたことで，グループの考えや試しの活動から，問題点や改善案を見いだすことができた。加えて，発言の手引きで，発言内容や方法を把握させたことで，互いが納得する根拠を示したり，互いのことを思いやった表現をしたりすることができた。

＜目次＞　学校教育部門作品

よりよい生活づくりを楽しむ子どもが育つ学級活動

～思いや願いを膨らませる活動構成を通して～

１　主題設定の理由 …… ３
（１）社会の要請から …… ３
（２）いじめ未然防止の観点から …… ３
（３）子どもの実態から …… ４
２　主題の意味 …… ４
（１）「よりよい生活づくり」とは …… ４
（２）「よりよい生活づくりを楽しむ」とは …… ４
（３）「思いや願いを膨らませる」とは …… ５
（４）「思いや願いを膨らませる活動構成」とは …… ５
３　研究の目標 …… ６
４　研究の仮説 …… ６
５　研究の構想 …… ６
（１）「Standing」のしかけ …… ６
（２）グループ活動の配置 …… ６
（３）学級会の活動形態 …… ７
（４）集団決定するための発言の手引き …… ７
（５）研究構想図 …… ７
６　研究の実際 …… ８
（１）実践事例Ⅰ …… ８
（２）実践事例Ⅱ …… １３
７　全体考察 …… １９
（１）「情意面」について …… １９
（２）「創意面」について …… １９
（３）「理解面」について …… １９
（４）学級や学校集団について …… ２０
８　成果と課題 …… ２０
（１）研究の成果 …… ２０
（２）今後の課題 …… ２０

＜参考文献＞ …… ２０

＜本文＞　学校教育部門作品

よりよい生活づくりを楽しむ子どもが育つ学級活動

～思いや願いを膨らませる活動構成を通して～

大牟田市立みなと小学校
教　諭　　千井　あゆみ

１　主題設定の理由

（１）社会の要請から

少子化・高齢化，地域社会や家族の変容により，社会全体の活力の低下，個々人の孤立化，規範意識の低下などが問題視されている。また，学校教育の中では，子どもたちが人間関係に不安を感じていたり，好ましい人間関係を築けず社会性の育成が不十分なことも見られる。このような社会状況の下，第２期教育振興基本計画において，今後の方向性として，「自立」「協働」「創造」の三つの理念の実現に向けた生涯学習社会を構築することが掲げられた。そして，本年度は，国立教育政策研究所より，「楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動指導資料(小学校編)」が作成された。これは，特別活動を充実させることで，人間関係形成能力，社会参画態度，自治的能力を育成していくことが期待されているといえる。

これらのことから，集団の中で，個々人が問題を解決する力を高め，主体的に問題を解決すること，自他のよさを認め合い，それらを生かしてともに集団活動に参画していくこと，それらの中で，工夫をしながら自分たちの生活をよりよく改善していくことを追求する本研究は，将来の社会人を育てる上で重要な役割をもつと考える。

（２）いじめ未然防止の観点から

本市では，本年度より新規事業として「いじめ・不登校防止子どもプロジェクト推進事業」を実施しており，現在各学校で，いじめの防止に向けて，児童会生徒会を中心とした，子どもたちの主体的な取組が進められている。また，本校でも，本校の教育課題から，重点目標を「基礎学力の定着」と「自己概念の向上」とし，いじめの未然防止への取組も活性化させ，自尊感情を高めるとともに，学力を向上させられる土壌づくりを推進している。

国立教育政策研究所より作成された生徒指導リーフには，いじめの未然防止のために，主に学校で取り組むべき課題の一つとして，「自己有用感」が挙げられている。自己有用感は，共同の目標の達成に向かう集団活動をする中で，友達とのかかわりを通し，「仲間から必要とされていること」や「自分も役に立っていること」を実感することで高められる。また，そのような経験を積み重ねることは，子どもたち同士の心的な結び付きが強くなるとともに，問題に対して，よりよい解決策を見いだす力も育まれ，自分たちでいじめを防ぐことにもつながる。つまり，本研究が目指す子どもが育つことは，いじめの未然防止にもつながると考える。

（３）子どもの実態から

本学級の子どもたちは，学級独自のものをつくる楽しさや学級の目標に向かって，学級のみんなで活動することの大切さを感じている。しかし，指示待ちの傾向があり，学級や学校生活における諸問題を自分から見いだし，みんなで話し合って実践して解決する経験も少ない。そのため，学級や学校を自分たちでよりよくしようとする意欲やその方法が高まっていないことが現状である。また，話合い活動においては，自分の考えをつくることが難しい，どのように伝えたらいいか分からず自信がないという理由から，意見を言えないでいる子どもも少なくはない。加えて，賛成・反対意見などを，理由を付けて表現することはできるが，一面的で独断的な傾向があり，互いの発意・発想を生かしながら，よりよい解決の方法を創り出せずにいる様子がある。

そこで，よりよい学級や学校生活を創造していく集団活動を積み重ねることで，集団の一員として，自発的，自治的に問題解決に取り組んでいく子どもを育てていく必要があると考え，本主題を設定した。

２　主題の意味

（１）「よりよい生活づくり」とは

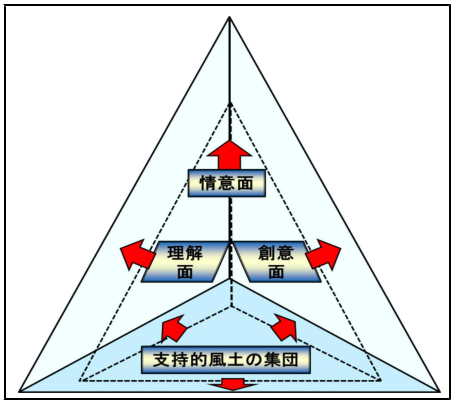
学級や学校目標の実現を目指して，生活上における諸問題を見付け，学級全員で話し合い，実践していくことを通し，学級や学校の文化や風土を創ることで，学級や学校生活を充実，向上させることである。

学級や学校における生活には，学級活動（１）で創る「わたしたちの生活」と，学級活動（２）で創る「わたしの生活」がある。本研究の「生活」は，学級活動（１）で創る「わたしたちの生活」とする。子どもたちが，「わたしたちの生活」における問題に自ら気付き，関心をもち，協働，創造しながら解決の方法を見いだし，取り組んでいく。それらを積み重ねることが，学級や学校生活の充実，向上につながっていく。

（２）「よりよい生活づくりを楽しむ」とは

話合いの手順や問題解決の方法を理解し，互いの智恵を合わせながら考えを創り出し，学級や学校目標の実現を目指す活動に意欲的に参画することを通し，受容や安定があり，互いの関係をよりよくできるような支持的風土の集団を創ることである。

よりよい学級や学校の生活は，子どもたちの自発的，自治的な活動によってのみ創られる。子どもたちの自発的，自治的な活動は，学級会の進め方や実践方法を分かって活用する理解面，折り合いを付けたり，考えを改善したりする創意面，思いや願いをもって参画し，学級生活の充実と向上を実感する情意面が促進されることでより機能していくと考える。そして，この三側面の促進により，支持的風土の集団が形成されていく。そこで，本研究で目指す具体的な子どもの姿を以下のようにとらえる。



【図１　よりよい生活づくりを楽しむ】

○　学級目標の実現を目指し，学級や学校の諸問題を自ら見付け，意欲的に話合いや実践に参画しようとするとともに，自分たちの活動によって，自分たちの生活が充実，向上していることを実感する子ども　【情意面】

○　よりよい集団決定ができるように，明確な根拠を基に問題点を見いだし，問題を改善できる工夫をして考えを創っていくとともに，実践の中で，新たな問題を見付け，よりよくする方法を考えながら活動する子ども　【創意面】

○　学級会の見通しをもち，提案理由や話合いのめあてに沿って話し合い，決まったことについて，分担された役割を果たして準備や実践を行うことが，学級目標の実現につながることを理解する子ども　【理解面】

（３）「思いや願いを膨らませる」とは

子どもたちが，「学級や学校をよりよくしたい。」「学級や学校の問題を解決したい。」という意欲をもち，互いの思いや願いを認め，生かしながら活動することを通し，学級や学校生活の充実，向上への意識を連続・発展させることである。

子どもたちが，学級会の話合いや決まったことの実践に自主的に取り組むためには，学級や学校生活の諸問題の解決に対して，思いや願いを強くもつことが基盤となる。個人がもっている思いや願いを，話合いや実践で互いに認め合い，生かし合うことで，各自の思いや願いが連続・発展していく。そのような話合いや実践を積み重ねることで，学級会の進め方や実践方法が分かり，折り合いを付けたり，考えを改善したりしながら集団決定し，実践して，新たな問題を改善し，学級生活の充実と向上を実感することができるようになると考える。

（４）「思いや願いを膨らませる活動構成」とは

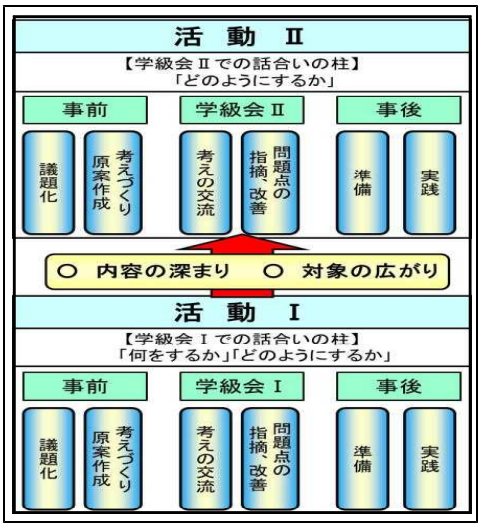
学級のよさや問題，これまでの経験から議題化し，学級会Ⅰで話し合って決定したことを実践していく中で，更によりよくしていきたいことを見付けて議題化し，学級会Ⅱで話し合い，実践を深めたり広げたりしていくことである。

具体的には，図２のとおりである。このような活動構成を仕組むことは，よりよい生活づくりを楽しむ子どもが育つために，以下のような価値がある。

○　活動Ⅰから，活動Ⅱへと対象の広がりや内容の深まりをもたせることで，学級目標の実現に，より近付いていることを実感することができる。

○　活動Ⅰから見付けた問題を活動Ⅱで話し合うので，関連した体験を基に，明確な根拠をもったり，よりよい方法を考えたりすることができる。

○　活動Ⅰでの成功，失敗体験を，活動Ⅱに生かすことで，話合いの進め方に見通しをもったり，考えの創り方を理解したりすることができる。



【図２　思いや願いを膨らませる活動構成】

３　研究の目標

高学年の学級活動（１）において，よりよい生活づくりを楽しむ子どもを育てるために，思いや願いを膨らませる活動構成の有効性について明らかにする。

４　研究の仮説

高学年の学級活動（１）において，関連した議題からなる活動Ⅰと活動Ⅱを仕組み，思いや願いを連続・発展させる活動構成にすれば，よりよい生活づくりを楽しむ子どもが育つであろう。

５　研究の構想

（１）「Standing」のしかけ

子どもたちが「こんな学級にしたい。」という目的意識をもって活動をしていくためには，学級の問題に気付き，発起する「Standing」の過程が重要である。この「Standing」の過程において，取り上げた問題に対し，子どもたちが関心を高め，「やってみたい。」「解決したい。」という思いや願いを強くすることで，その後の活動において思いや願いを連続・発展させることができると考える。そこで，議題化する際，表１のような手だてを図る。

特定の子どもの思いの周知	【方法】 日頃の会話や日記の中から，一人の子どもの思いを，学級全体に伝える。
	【効果】 特定の子どもの思いに，みんなで寄り添うことで，願いを叶えたい思いが波及する。
学級や学校の現状の可視化	【方法】 画像，映像，アンケート集計や活動結果を数値化したものを提示する。
	【効果】 学級や学校の現状を視覚的に把握することができ，問題に対する切実感を高められる。
活動経験や学級のよさの評価	【方法】 これまでの活動を想起させ，活動を価値付けしたり，学級のよさを認めたりする。
	【効果】 活動への見通しや，学級への愛着をもつことができ，生活向上への意欲喚起となる。

【表１　Standing のしかけ】

（２）グループ活動の配置

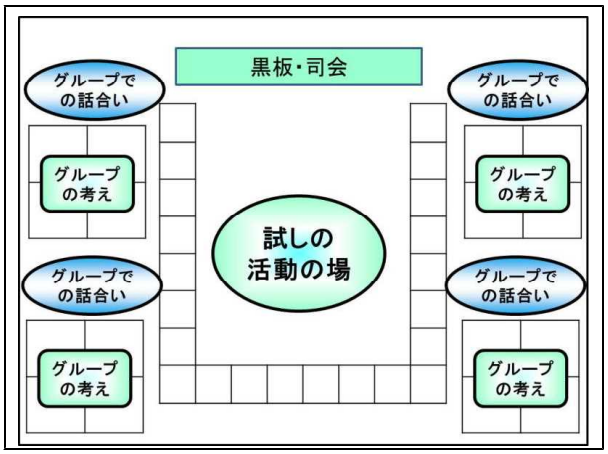
各自の思いや願いを連続・発展させていくためには，個人がもっている思いや願いを，話合いや実践で表現し合う中で，互いの考えを認め合い，生かし合うことが必要である。自分の考えが認められ，承認欲求が満たされることで，次の活動への意欲につながっていくからである。そこで，小集団を編制し，自分の考えを一人一人が表現できる場面を位置付ける。少人数での話合いは，全体での話合いよりも，「恥ずかしい」「自信がない」という心理的要因を解き，安心して考えを伝えることが可能である。また，人数が少ないため，自分の意見を伝える必要感をもつこともでき，参画意識をもって活動することができると考える。そこで，事前の活動，学級会での話合い，事後の活動において，グループでの活動を取り入れていく。グループの構成員，グループでの活動内容は表２のとおりである。これらのグループ活動は，活動Ⅰ，Ⅱにおいて話し合う内容に応じて，位置付けていくようにする。

	場面	内容や方法
事後	準備，実践	**（基本グループ）** 実践への準備をする。 **（新規グループの編制）** 学級会で新たな案が出た場合には，準備したい内容の希望を取って新しいグループを編制し，準備・実践を行う。
学級会	問題点の改善	**（基本グループ）** 問題点に対して，改善できるようなよりよい考えが出ない場合や，合意を図れない場合に，再度戻って，話し合う。
	考えの交流	**（基本グループ）** 考えた原案を提案したり，混合グループで事前に指摘された問題点を改善するために話し合ったりする。
事前	原案の交流，検討	**（混合グループの編制）** 基本グループのメンバーを分散させた新たなグループを編制する。そのグループで，基本グループで作成した原案を提案し合い，問題点を出し合う。
	考えづくり原案作成	**（基本グループの編制）** 話し合う内容や事前の自分の考えを基に，自分が話し合いたい内容を選択してグループを編制し，原案を作成する。

【表２　グループ活動の配置】

（３）学級会の活動形態

学級会の話合いの活性化，効率化を図るために，図３のような話合いの活動形態を仕組む。互いに顔を見合いながら，全体で話合いができる隊形を基本にし，グループで話合いができる場の設定をする。また，各グループの考えを自由に見て回りながら，考えを交流できるフリーの時間を確保することで，各グループの考えを確認したり，疑問点や問題点を考えたりできるようにする。



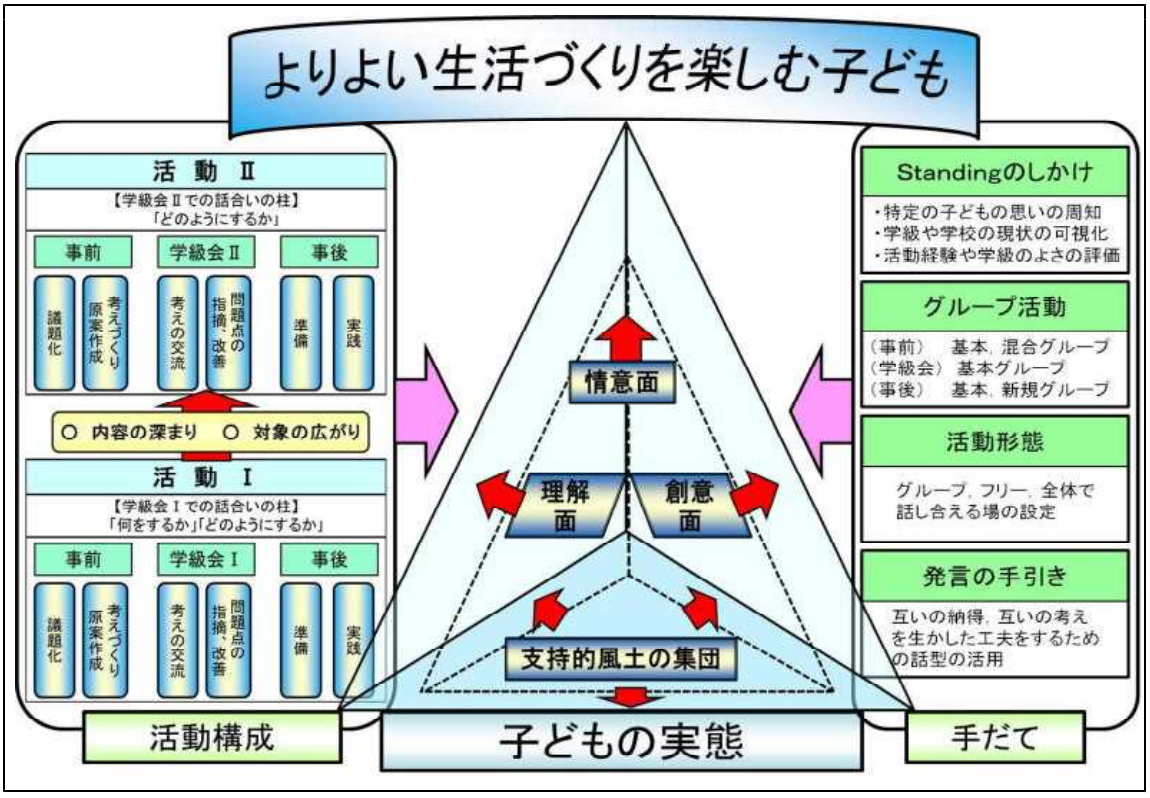
【図３　学級会の活動形態】

（４）集団決定するための発言の手引き

折り合いを付け，よりよい集団決定をするためには，互いが納得できるような根拠を示したり，少数意見も生かせるような工夫を考えたりすることが大切である。そこで，発言の手引きの掲示とファイリングを行い，明確な根拠を考えたり，創意を促したりできるようにする。

【図４　発言の手引き】

（５）研究構想図



６　研究の実際

（１）実践事例Ⅰ

第５学年　　議題　「学級スローガンが伝わる５の１のオリジナルソングをつくろう」 活動内容（１）ア　学級や学校における生活上の諸問題の解決

ア　本実践における目指す子どもの姿

○　学期目標「ゴールドＺスター号を仲間と創ろう」を目指し，「オリジナルの学級の歌をつくりたい。」という思いや願いをもって，積極的に話合いや実践に取り組み，自分たちで学級独自の文化を創ることができたことを実感することができる。【情意面】

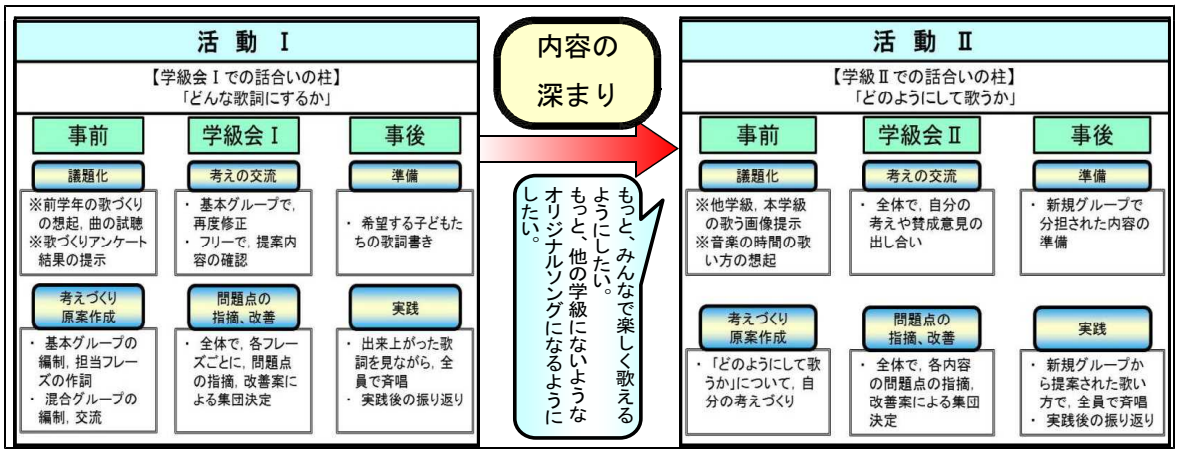
○　「何のためにするのか。」という目的性，「みんなができるか。」という相互性，「自分たちでできるか。」という現実性の観点を基に，互いの考えを修正しながら歌詞を創ったり，話合いや準備の中で，もっと楽しく歌う方法を見いだしたりすることができる。【創意面】

○　学級を表すオリジナルソングにするために，互いの考えの問題点を見付け，改善していく話合いの進め方が分かるとともに，任された準備を工夫しながら行い，楽しく歌っていくことで，学級目標の実現につながることを理解できる。【理解面】

イ　授業仮説

本学級の子どもたちは，前学年において，一人１フレーズずつの作詞をし，教師主導で学級の歌をつくって歌う体験をしてきている。また，歌を歌うことが好きという学級のよさがある。このような子どもたちの実態を基に，本議題において，図５のような活動構成を仕組む。

歌詞づくりの経験から議題化することで，話合いの進め方や実践の仕方に見通しをもつことができる。また，学級独自の文化を創り，自分たちのよさも表せるため，学級目標を具現化する活動に意欲的に参画し，自治的な活動による達成感をもたせることができる。更に，グループで創ったフレーズを全体でよりよくしていく学級会Ⅰ→内容を深め，もっと楽しく歌う方法を考える学級会Ⅱを通して，改善や工夫を見いだすことができると考える。このことから，自発的，自治的活動をより機能させる「情意面」「創意面」「理解面」を育てることができるだろう。



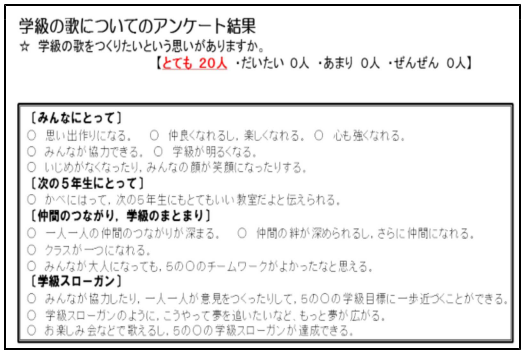
【図５　実践Ⅰ活動構成】

ウ　実践事例Ⅰの実際と考察

(ｱ) 活動Ⅰ（事前の活動）

〔ねらい〕
「オリジナルの学級の歌をつくりたい。」という思いや願いをもち，学級スローガンを基に分けられたテーマを考えながら，歌詞を創る。

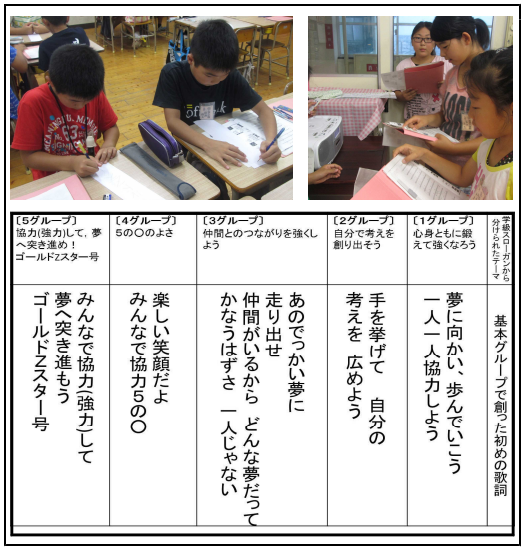
「学級の歌をつくりたい。」という思いや願いをもたせるために，「Standing」のしかけとして，「前学年でつくった学級の歌を聞いてみたい。」という教師の思いを伝え，前学年での学級の歌の作り方を問いかけた。子どもたちは，前学年の学級の歌を歌ったり，主幹教諭が作曲したものに，教師とともに歌詞を付けていったことを想起したりした。その時，今の学級には，学級の歌がないことに気付き，「５年生でも学級の歌をつくりたい。」という声が挙がった。そこで，主幹教諭が本学級をイメージして作曲した曲を流すことで，「今度は自分たちで作詞をしたい。」という思いや願いを強くし，議題ポストに学級の歌をつくる提案が入った。


学級の歌についてのアンケート結果
☆ 学級の歌をつくりたいという思いがありますか。
【とても 20人 ・だいたい 0人 ・あまり 0人 ・ぜんぜん 0人】

〔みんなにとって〕
○ 思い出作りになる。　○ 仲良くなれるし，楽しくなれる。○ 心も強くなれる。
○ みんなが協力できる。○ 学級が明るくなる。
○ いじめがなくなったり，みんなの顔が笑顔になったりする。
〔次の５年生にとって〕
○ かべにはって，次の５年生にもとてもいい教室だよと伝えられる。
〔仲間のつながり，学級のまとまり〕
○ 一人一人の仲間のつながりが深まる。　○ 仲間の絆が深められるし，さらに仲間になれる。
○ クラスが一つになれる。
○ みんなが大人になっても，５の○のチームワークがよかったなと思える。
〔学級スローガン〕
○ みんなが協力したり，一人一人が意見をつくったりして，５の○の学級目標に一歩近づくことができる。
○ 学級スローガンのように，こうやって夢を追いたいなど，もっと夢が広がる。
○ お楽しみ会などで歌えるし，５の○の学級スローガンが達成できる。

【資料１　学級の歌づくりへの思いや願い】

また，「何のために学級の歌をつくるのか。」という目的を明確にさせるために，アンケートを採り，「学級の歌をつくるとどんな学級になるのか。」というアンケート項目の結果を提示した（資料１）。



〔5グループ〕協力(強力)して，夢へ突き進め！ゴールドZスター号	〔4グループ〕5の○のよさ	〔3グループ〕仲間とのつながりを強くしよう	〔2グループ〕自分で考えを創り出そう	〔1グループ〕心身ともに鍛えて強くなろう	学級スローガンから分けられたテーマ
みんなで協力(強力)して 夢へ突き進もう ゴールドZスター号	楽しい笑顔だよ みんなで協力5の○	あのでっかい夢に 走り出せ 仲間がいるから　どんな夢だって かなうはずさ　一人じゃない	手を挙げて　自分の 考えを　広めよう	夢に向かい、歩んでいこう 一人一人協力しよう	基本グループで創った初めの歌詞

【資料２　事前の活動の歌詞づくり】

その後，学級会での話合いに入る前に，グループでフレーズごとに作詞をする原案作成を行った。まず，主幹教諭の作曲を五つに分割し，学級スローガンから，五つのテーマを立てた。それらのテーマに沿った歌詞を創っていくグループを編制するために，つくりたい歌詞のテーマを希望聴取し，五つの基本グループに分けた。子どもたちは，リコーダーやＣＤを使いながら，担当したテーマに合うように，グループの友達と作詞をしていた（資料２）。更に，五つの基本グループを一人一人分けて編制した混合グループで，互いの歌詞を提案し，質問や問題点を出し合った。ここでは，なぜそのような歌詞にしたのかという根拠を示しながら，一人一人が基本グループの考えを伝えるようにした。互いの考えを聞くことで，重なっている言葉があることや，テーマに合わない部分があることに気付き，問題点を出し合っっていた。また，「こうすればいいのではないか。」という助言もしていた。

〔考察〕
歌詞づくりの想起により，「自分たちの学級だけの歌をつくりたい。」という思いや願いを強くすることができた。また，アンケート集計結果の提示により，学級の歌を創ることが，学級目標に近付く活動であるという目的意識をもつことができた。

(ｲ) 活動Ⅰ（学級会Ⅰ）

〔ねらい〕

目的性，相互性，現実性の観点を基に問題点を見付け，歌詞をよりよくする考えを見いだして「どんな歌詞にするか。」を集団決定する。

も：学級スローガンや５の○のよさを表しているか　〔目的性〕
み：みんなにかかわる歌詞で，みんなが楽しく歌えるか　〔相互性〕
じ：曲に合わせながら歌え，簡単で覚えやすいか　〔現実性〕

〔三つの観点〕

【資料３　学級会Ⅰの活動過程と板書】

資料３のような活動過程の下，基本グループ，フリー，全体での話合いができるような活動形態をつくり，それぞれのグループで創った歌詞について話し合った。まず，事前の活動で出された問題点を貼ったグループシートを使って，基本グループでフレーズを修正していった。１グループでは，「協力が重なっている。」「心身ともに鍛えて強くなろうというテーマがあまり分からない。」という問題点に対して，「協力を努力に変えたらよくなる。」という考えを出して，グループで改善していた。次に，フリーで，各グループの内容について，質問や問題点がないかを確認させた。すると，その後の全体での話合いで，全グループの考えに対し，質問や問題点が出された。また，資料４のように，根拠を示し，お互いの考えに寄り添ったり，よりよい考えを創り出したりしながら話し合い，歌詞を集団決定していた（資料５）。

司会：　次に，2グループに，もみじの「じ」から，「タイミングが合わず，曲に合わせて歌えない」という問題点が出ていましたが，それに対して，よりよい考えはありませんか。
A児：　その歌詞を考えてくれた2グループさんに一度歌ってもらったらいいと思います。
司会：　2グループさん歌ってもらっていいですか。　～2グループが歌う～
B児：　「手を挙げて自分の考えを」まで，最初の部分に入れたら合うと思います。それと，後の部分を「みんなに」を入れるとタイミングが合うと思います。
C児：　Bさんに付け加えて，「広めよう。」を「伝えよう。」にするといいと思います。
司会：　よりよい考えが出ましたが，一度みんなで歌ってみましょう。　～全員で歌う～
D児：　「自分の考えを」のところが合わないので，「自分の」をはずしてもいいと思います。
E児：　2グループさんは，学級目標の「自分で考えを創り出す」という思いで，「自分の」を入れたのなら，「自分の」を入れていいと思うし，そうでないのならば外してもいいと思います。
F児：　みんなから意見をもらったので，一度，2グループで相談してもいいですか。　～2グループで話合い～
F児：　「自分の」を入れたいです。理由は，学級目標が「自分で考えを創り出そう」だから，それを表したいからです。それと，「伝えよう。」でなく，「広めよう。」の方が，たくさんの人に考えを分かってもらうのでいいと思います。
G児：　タイミングが合わないのなら，「を」を取って，「自分の考え」にしたら短くなると思います。

【資料４　全体の話合いでの子どもの発言】

〔5グループ〕協力(強力)して，夢へ突き進め！ゴールドZスター号	〔4グループ〕5の○のよさ	〔3グループ〕仲間とのつながりを強くしよう	〔2グループ〕自分で考えを創り出そう	〔1グループ〕心身ともに鍛えて強くなろう	学級スローガンから分けられたテーマ
夢へ突き進もう みんなで協力(強力)して ゴールドZスター号(×2)	にこにこ笑顔だよ みんなが楽しい5の○	あのでっかい夢に 走り出せ GO!(×2) 果てしなく続く 流れ星 と進む 仲間がいる	手を挙げて 自分の考え みんなに広めよう	夢に向かい、歩んでいこう 一人一人努力しよう	全体で集団決定した歌詞

【資料５　集団決定した歌詞】

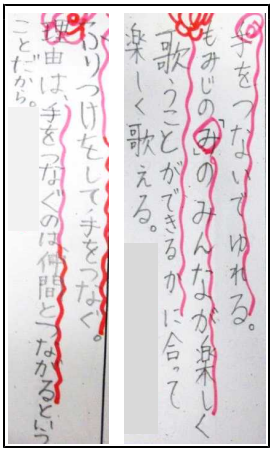
〔考察〕

基本グループでの修正→フリーでの確認→全体での問題点の指摘，改善という活動過程を仕組んだことで，目的性，相互性，現実性から根拠を示して問題点を出し合い，それらを改善できるような考えを見いだし，よりよい歌詞にして集団決定することができた。

(ｳ) 活動Ⅰ(事後の活動)，活動Ⅱ(事前の活動)

〔ねらい〕
学級の歌を歌う実践から，新たな問題に気付き，「学級の歌をもっとみんなで楽しく歌えるようにしたい。」という思いや願いをもち，歌い方について，考えを創る。

学級会で創った学級の歌を全員で歌った。体を揺らしたり，リズムを取ったりしながら楽しそうに歌う子どももいたが，黒板に貼られた歌詞を見ながら，前を向いて，直立したまま歌う子どももいて，歌い方には差があり，工夫もあまりなかった。そこで，学級の歌の歌い方の工夫をしたいという思いをもたせるために，他学校での学級の歌の実践と，本学級での歌の歌い方の写真を提示した。また，音楽の時間，歌をパートに分かれて歌ったり，合奏したりしたことを想起させた。すると，子どもたちから「もっと，みんなで楽しく歌えるように工夫したい。」「歌い方をアレンジしてみたい。」という言葉が出た。その後，自分の考えを創らせた。他学校の実践の写真や音楽の時間の活動が例示ともなり，歌い方の工夫を考えることができた(資料６)。



【資料６　事前の考え】

〔考察〕
活動Ⅰの実践から問題を取り上げ，写真を提示し，音楽の時間の想起をさせて議題化したことで，「みんなで楽しく学級の歌を歌いたい。」という思いや願いを強くすることができた。

(ｴ) 活動Ⅱ(学級会Ⅱ)

〔ねらい〕
目的性，相互性，現実性の観点を基に問題点を見付け，出し合った歌い方ができるようなよりよい考えを見いだしながら，「どのようにして歌うか。」を集団決定する。

ここでは，事前の考えを出し合う→問題点を見付ける→改善案を提案するという活動過程で話合いを進めた。子どもたちは，学級スローガンを表せるような歌い方，みんなが楽しく歌えるような歌い方など，目的性，相互性の観点に沿った考えを出し合っていた。ここで，新たな現実性の観点「無理なく自分たちで準備したり，歌ったりすることができるか。」を提示し，現実性を満たしているかどうかを判断させた。子どもたちは，現実性から問題点を見付けることで，友達の考えに納得したり，その問題点を改善できる方法を発言したりしていた(資料７)。

司会：今出ている意見に対して，もみじの観点から問題点はありませんか。
F児：　私は，「じ」の観点から，楽器を使って歌うということに問題があると思います。理由は，学校の楽器を自分たちで勝手に使えないから，自分たちで準備できないからです。
H児：　僕は，「振り付けをする」「手拍子をする」に問題点があると思います。理由は，振り付けや手拍子をすると，そっちに集中してしまって，みんなが楽しく歌うことができないからです。
I児：　僕は，「楽器を使う」ということに問題点があると思います。楽器を使うと，歌が聞こえなくなってしまうからです。
F児：　Iさんに付け加えて，「手拍子をする」ことも問題点があると思います。
司会：問題点をよりよくする方法はありませんか。
J児：　楽器を使ったり手拍子をしたりすると，歌が聞こえないという問題点が出ましたが，歌う部分じゃなくて，歌を歌わない空いているところで楽器を使ったり手拍子をしたりするといいと思います。
H児：僕は，歌うところに手拍子を入れて，後で先生に編集してもらうと歌も聞こえると思います。
F児：先生に編集してもらったのは反対です。理由は，自分たちでつくりたいのに，自分たちで歌をつくることにならなくなるし，「じ」にも合わないと思います。
司会：Hさん，どう思いますか。
H児：Fさんの意見を聞いて，Fさんの意見に賛成します。
司会：楽器を使って歌うことの問題点についてはどうですか。
A児：楽器は，教室にあるオルガンやリコーダーを使ったり，カスタネットとか小さい楽器を使うと，準備できると思います。

- ○ グループに分かれて歌う。
- ○ 歌わないときに，手拍子をする。
- ○ リコーダーやカスタネットを使って，歌わないときに楽器を入れる。
- ○ 手をつないだり，ハイタッチをしたりして，振り付けをつくる。
- ○ 歌詞を書いた模造紙に，シンボルマークや絵や模様を付ける。

【資料７　学級会Ⅱでの子どもの発言と集団決定した内容】

〔考察〕
学級会Ⅰと同じような活動過程を仕組んだことで，三つの観点から問題点を指摘し合い，それらを改善できるような方法を見いだし，集団決定することができた。

(オ) 活動Ⅱ(事後の活動)

〔ねらい〕
「もっと楽しく歌いたい。」という思いや願いをもち，集団決定した歌い方に工夫を入れながら，担当した準備を積極的に行い，提案し合った歌い方で，学級の歌を楽しく歌う。

集団決定した歌い方を，どのように工夫するかを考えるために，新規グループを編制した。どの歌い方について考えるかを選択させ，５グループに分けた。「グループに分かれて歌う」ことを考えるグループでは，グループの分け方と歌う部分を提案していた(資料８)。そのとき，「みんなで楽しく歌いたいので，全員で歌うところを多くしました。」と，思いや願いを付け加えながら，発表していた。また，「振り付けをつくる」ことを考えるグループでは，学級のオリジナルの振り付けになるように，学級スローガンをイメージできる振り付けを提案していた。各グループからの提案後，それらを使って，全員で実践をした。歌を歌ってみた後，「楽器や手拍子で歌が聞こえないところがある。」「みんなが覚えられるように少し簡単にして，みんなが歌いながらできるようにした方がいい。」という新たな問題点や改善案も出された。そこで，再度，各グループに戻って話し合い，歌を歌うことを繰り返し，みんなが楽しく歌う工夫を重ねていた(資料９)。

〔男女混合で出席番号順に2グループに分ける〕

歌詞	1回目	2回目
夢に向かい、歩んでいこう 一人一人努力しよう 手を挙げて　自分の考え みんなに広めよう	全員で歌う	1グループが歌う
あのでっかい夢に 走り出せ　GO！(×2) 果てしなく続く　流れ星 と進む　仲間がいる	全員で歌う 「走り出せ　GO！」の部分 →　初め…1グループ 　　後　…2グループ	2グループが歌う 「走り出せ　GO！」の部分 →　初め…1グループ 　　後　…2グループ
にこにこ笑顔だよ みんなが楽しい5の○ 夢へ突き進もう みんなで協力(強力)して ゴールドZスター号(×2)	全員で歌う 「グールドZスター号」の部分 →　初め…2グループ 　　後　…1グループ	全員で歌う 「グールドZスター号」の部分 →　初め…2グループ 　　後　…1グループ

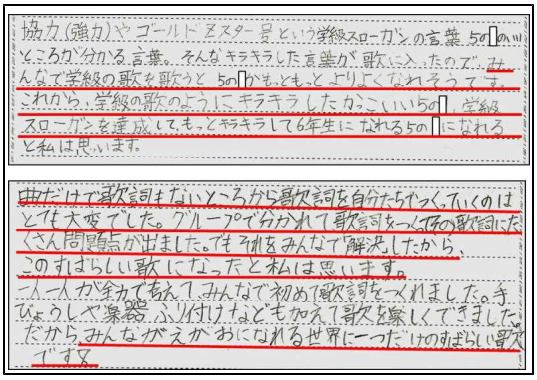
【資料８　「グループに分かれて歌う」歌い方の提案の様子と内容】

【資料９　実践の様子】

〔考察〕
学級会Ⅰ，Ⅱで問題点の指摘，改善の話合いを行い，一人一人が選択した新規グループで，歌い方の工夫を話し合ったことで，「みんなが楽しく歌えるようにしたい。」という思いや願いを継続させながら，工夫や改善を重ね，楽しく歌うことができた。

(カ) 実践事例Ⅰの考察

資料 10 から，学級の歌をつくり歌っていくことで，学級目標に近付き，学級がよりよくなったと感じていることが分かる。更に，自分たちだけの文化を創ることができたこと，それを創るために自分たちで問題点を見付け，よりよくすることのよさを理解していることもうかがえる。このように，自分たちで問題点や改善方法を見いだしながら話合いや実践を行い，学級生活の充実，向上を実感していることから，「情意面」「創意面」「理解面」を育てることができたと考える。



協力(強力)やゴールドZスター号という学級スローガンの言葉5の□のいいところが分かる言葉。そんなキラキラした言葉が歌に入ったので、みんなで学級の歌を歌うと5の□かもっともっとよりよくなれそうです。これから、学級の歌のようにキラキラしたかっこいいの□、学級スローガンを達成してもっとキラキラして6年生になれる5の□になれると私は思います。

曲だけで歌詞もないところから歌詞を自分たちがつくっていくのはとても大変でした。グループで分かれて歌詞をつくるとき歌詞にたくさん問題点が出ました。でもそれをみんなで解決したから、このすばらしい歌になったと私は思います。
一人一人が全力でがんばってみんなで初めて歌詞をつくれました。手びょうしや楽器ふり付けなども加えて歌を楽しくできました。だからみんながえがおになれる世界に一つだけのすばらしい歌です。

【資料 10　事後の感想】

（２）実践事例Ⅱ

第５学年　　議題　「来年のリレー大会に向けての体力アップ作戦をつくろう」
「３，４年生にスポーツタイムの取組を提案しよう」
活動内容（１）ア　学級や学校における生活上の諸問題の解決

ア　本実践における目指す子どもの姿

○　来年度のリレー大会での学校の活躍を目指し，「学級や学校の体力を高め，他の学校に勝ちたい。」という思いや願いをもって，積極的に話合いや実践に取り組み，自分たちでよりよい校風をつくろうとすることができる。【情意面】

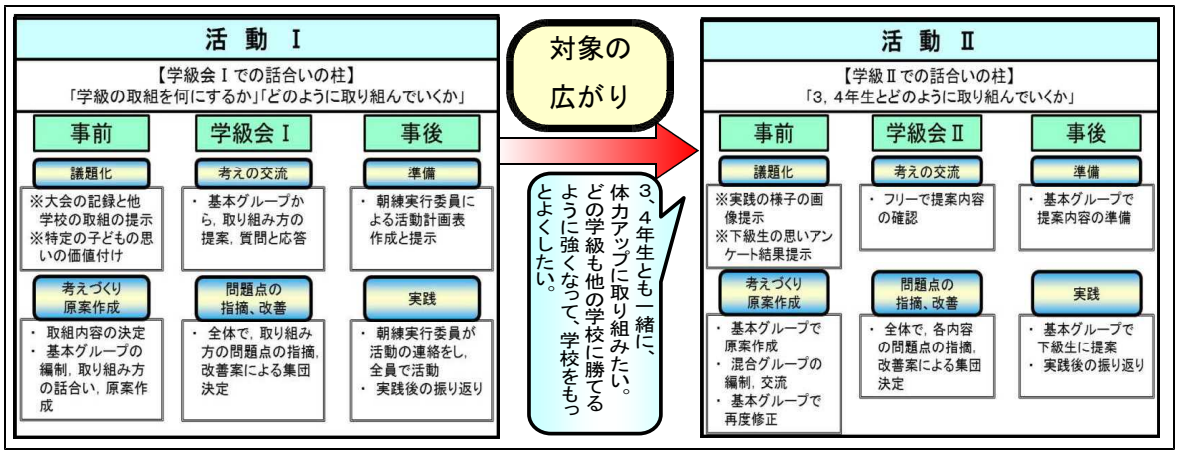
○　「何のためにするのか。」という目的性，「協力してできるか。」という協同性，「みんなが続けられるか。」という現実性の観点を基に，互いの考えを修正しながら取組を創ったり，話合いや実践の中で，新たな問題や改善案を見いだしたりすることができる。【創意面】

○　下級生と目標に向かって活動するために，互いの考えの問題点を見付け，改善する話合いの進め方が分かるとともに，役割を果たして準備や実践を行うことが，学校生活を充実，向上させ，下級生の喜びになること，学級目標の実現につながることを理解できる。【理解面】

イ　授業仮説

本学級の子どもたちは，本市で開催される地区競技会（４，５，６年学級対抗）に向けての練習に取り組んだが，最下位という結果に終わっている。また，他学級も同様の結果で，本校の課題として，体力向上や学校の問題に関心をもって取り組む自主的な態度が挙げられる。このような子どもたちや本校の実態を基に，本議題において，図６のような活動構成を仕組む。

大会の課題から議題化することで，学級や学校の問題を自分たちの問題としてとらえることができるため，学級目標を具現化する活動に意欲的に参画し，学校をよりよくしようとすることができる。また，学級で取り組む内容や方法を決める学級会Ⅰ→対象を広げ，下級生と一緒に取り組む方法を決める学級会Ⅱを通して，話合いの進め方や考えの創り方を理解し，新たな問題や改善案を見いだすことができると考える。このことから，自発的，自治的活動をより機能させる「情意面」「創意面」「理解面」を育てることができるだろう。



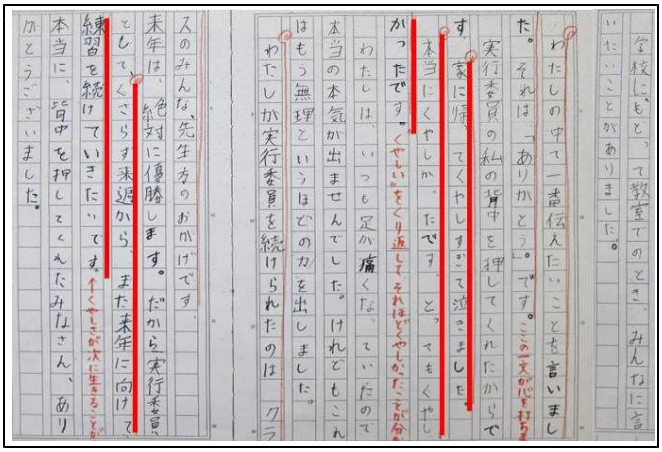
【図６　実践Ⅱ活動構成】

ウ　実践事例Ⅱの実際と考察

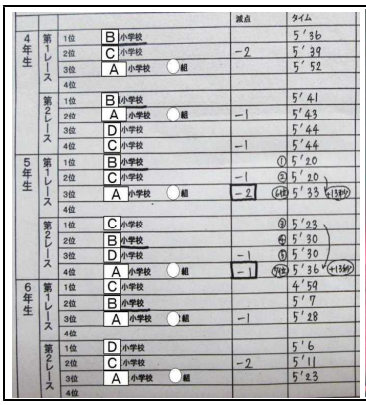
(ｱ) 活動Ⅰ（事前の活動）

〔ねらい〕
「来年のリレー大会で他の学校に勝ちたい。」という思いや願いをもち，走力を高められる体力づくりの内容を決め，取り組む方法を創る。

「来年のリレー大会で優勝できるように，これからも，みんなでリレーの練習をしたい。」という思いや願いをもたせるために，「Standing」のしかけとして，リレー大会後のＡ児の日記を黒板背面に掲示したり，学級通信に掲載したりした（資料 11）。「また来年に向けて練習を続けていきたい。」というＡ児の思いとともに，大会の結果を提示した（資料 12）。自分たちの学級が５年生２レース，全てのチームの中で最下位だったこと，また，他学年も残念な結果だったことに危機感をもっていた。また，昨年度優勝できていなかったＢ小学校が，今年度，優勝を取っている学級が多いことに気付かせ，Ｂ小学校が一年間，目標をもって練習に取り組んできたことを紹介した。その話を聞いたＢ児は，「優勝できるように，自分たちも今から練習をしたい。」という思いを強くし，放課後，黒板に練習の提案を書いていた。そこで，Ｂ児の思いを加えながら，Ｂ児の行動を価値付けした。すると，放課後，子どもたちは自分たちで練習を始め，議題ポストにも「みんなで取り組む練習を決めたい。」という提案が入った。

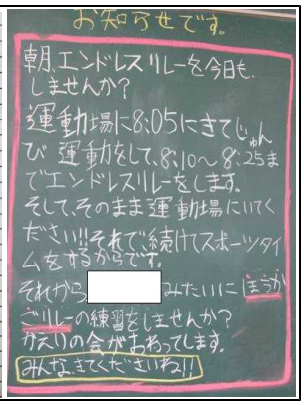


【資料 11　リレー大会後のＡ児の日記】



				減点	タイム
4年生	第1レース	1位	B 小学校		5'36
		2位	C 小学校	−2	5'39
		3位	A 小学校 ○組		5'52
		4位			
	第2レース	1位	B 小学校		5'41
		2位	A 小学校 ○組	−1	5'43
		3位	D 小学校		5'44
		4位	C 小学校	−1	5'44
5年生	第1レース	1位	B 小学校	①	5'20
		2位	C 小学校	−1 ②	5'20
		3位	A 小学校 ○組	−2 (6位)	5'33 (+13秒)
		4位			
	第2レース	1位	C 小学校	①	5'23
		2位	B 小学校	①	5'30
		3位	D 小学校	−1 ①	5'30
		4位	A 小学校 ○組	−1 (7位)	5'36 (+13秒)
6年生	第1レース	1位	C 小学校		4'59
		2位	B 小学校		5'7
		3位	A 小学校 ○組	−1	5'28
		4位			
	第2レース	1位	D 小学校		5'6
		2位	C 小学校	−2	5'11
		3位	A 小学校 ○組		5'23
		4位			

【資料 12　大会の結果】



【資料 13 Ｂ児の練習の提案】

学級会の効率化を図るために，事前に，全員で取り組む練習の内容を決めるようにした。そのために，取り組みたい練習内容のアンケートを採り，計画委員で集計した。そのうち，学級みんなでできるもの四つを全員で承認し，それらの取組をどのように取り組んでいくかを原案作成した。原案作成は，四つの取組の中から，自分が考えたい取組を一つ選択させて編制した基本グループで行った。「いつするのか。」「どんなチームでするのか。」「どんなルールでするのか。」について，話し合って画用紙にまとめ，提案の練習もしていた。

〔考察〕
大会記録を提示し，他の学校の取組を紹介したり，練習に向けてのＡ児やＢ児の思いを価値付けしたりしたことで，「優勝するために，自分たちで取組を決めて練習していきたい。」という思いや願いを強くすることができた。

(イ) 活動Ⅰ(学級会Ⅰ)

〔ねらい〕
目的性，協同性，現実性の観点を基に問題を見付け，四つの取組ができるような考えを見いだしたり，取組の工夫を考えたりして「どのように取り組んでいくか。」を集団決定する。

基本グループからの提案→問題点の指摘→改善案という活動過程の下，チーム編制の試しの活動ができるような活動形態をつくり，それぞれのグループで創った取組方法について話し合った。まず，事前の活動で書いた画用紙を使って，基本グループで取組の方法を提案した(資料14上)。初めに，練習時間の問題点に気付かせるために，提案された練習時間をまとめた日程表を計画委員に提示させた(資料14中央)。子どもたちは，練習時間が重なっている取組を空いているところに移動させていった。しかし，練習をする時間が多くなったため，現実性の観点から，「無理なく続けるために，休みを入れた方がいい。」「リレーおにごっこが多いので，一回減らしてはどうか。」という改善案が出された。また，チームについては，「A，Bチームばかりなので，いろんな友達と協力することができない。」という協同性からの問題点が出された。その問題点を改善するために，他にどんなチームをつくることができるかを話し合った。「出席番号のチーム」や「身長順のチーム」という意見が出されたが，「走力が平等なチームでないと，走力が高められない。」という目的性からの問題点が出された。そこで，

		リレーおにごっこ	チームリレー	ライバル走	エンドレスリレー
ルール		どちらかがタッチするまで，リレーを続ける。時間内に終わらなかったら，距離が短かった方の勝ち。	リレー大会と同じようにチームで，全力で走る。	自分と同じくらいの走力の人2～3人とグループになり，50m走の競争をする。	時間内いっぱい続けて走る。最後の人は，最初の人にバトンパスして続ける。
チーム		A，Bチーム	A，Bチーム		A，Bチーム
期日	朝	月・木		月・水	
	放	火・木	火・木		火

〔三つの観点〕
も：みんなの心身が鍛えられ，走力を高めることができるか。〔目的性〕
み：みんなが参加し，協力しながらできるか。〔協同性〕
じ：みんなが無理なく続けることができるか。〔現実性〕

	月	火	水	木	金
朝	○リレーおにごっこ ○ライバル走		○ライバル走	○リレーおにごっこ	
放課後		○リレーおにごっこ ○チームリレー ○エンドレスリレー		○リレーおにごっこ ○チームリレー	

		リレーおにごっこ	チームリレー	ライバル走	エンドレスリレー
チーム		A，Bチーム	A，Bチーム		A，Bチーム
		○ 身長順で走力を同じにしたチーム ○ A男子B女子，B男子A女子のチーム			
期日	朝	木・金		月・水	
	放	火	水		金

	月	火	水	木	金
朝	○ライバル走		○ライバル走	○リレーおにごっこ	○リレーおにごっこ
放課後		○リレーおにごっこ	○チームリレー		○エンドレスリレー

「走力が平等か分からないので，一度並んでみたらいい。」という提案が出た。そして，全員で二つのチームに並び，チームのメンバーを確認したり，メンバーを入れ替えたりしながら平等になるように決めていった。また，「A，Bチームは，走力は平等なので，男女を入れ替えたチームをつくってもいいのではないか。」という新たな考えも出され，A，Bチーム以外のチームをつくっていた(資料14下)。

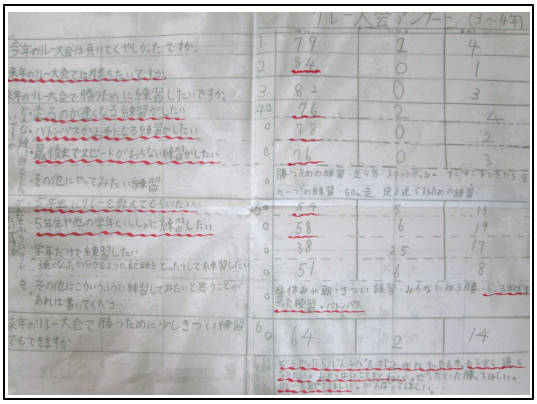
〔考察〕
基本グループからの提案→全体での問題点の指摘→改善という活動過程を仕組み，試しの活動ができる活動形態にしたことで，目的性，協同性，現実性から根拠を示して問題点を出し合い，試しの活動をしながら改善方法を見いだし，四つの取組ができるような練習日程や工夫したチーム編制を集団決定することができた。

(ｳ) 活動Ⅰ(事後の活動)，活動Ⅱ(事前の活動)

〔ねらい〕
練習に取り組む実践から，新たな問題に気付き，「下級生とも練習し，どの学級も勝てるようにしたい。」という思いや願いをもち，下級生との練習内容と方法について，考えを創る。

朝練実行委員の子どもたちが，練習日程表を作成し，次の予定を連絡したり，めあて設定や振り返りをしたりし，練習に取り組んだ。運動場で５年生が練習をしていると，その様子を見ている下級生や「練習に参加したい。」と寄って来て一緒に練習をする下級生が増えてきた(資料 15)。そこで，「下級生とも一緒に練習をしたい。」「どの学級も勝てるように強くなって，学校をもっとよくしたい。」という思いや願いをもたせるために，実践の様子の写真を教室背面に掲示し，価値付けしたり，リレー大会の結果を再度提示したりした。すると，「下級生もできるような取組を話し合いたい。」という提案が議題ポストに入った。ここでは，下級生の思いや願いも込められた取組にするために，下級生にアンケートを採るようにした。計画委員でアンケートを集計し，掲示することで，「５年生と一緒に練習をしたい。」「５年生に教えてもらいたい。」「足が速くなったり，バトンパスが上手になったりしたい。」という下級生の思いや願いに気付くことができた(資料 16)。

【資料 15　実践の様子】



【資料 16　下級生に採ったアンケートの集計】

学級会Ⅱの効率化を図るために，取組の内容の決定と，取り組む方法について，原案作成→交流→修正を，事前の活動で行った。取組の内容は，これまで学級で行っていた練習と，「下級生が楽しくできるような練習も取り入れたい。」という理由から，「けいどろ」を加え，五つに決定した。そして，基本グループで，各内容の取り組み方について，原案を作成し，混合グループで原案の交流をした。運動場の図や３，４，５年生の人数を書いた表を基に問題点を出し合い，再度，基本グループでよりよい考えを創っていた(資料 17)。

	方法	チーム	場所
〔1グループ〕けいどろ	○ 3年生と4年生がバトンを渡しながらにげる。 ○ 5年生(鬼)がバトンを取りに行く。 ○ はさみうちはなし。	○ 3，4年生のクラスが同じ同士がチーム	○ 運動場全部
〔2グループ〕エンドレスリレー	○ 時間いっぱい，バトンパスをしながらチームで走り続ける。	○ 3年生対4年生対5年生	○ 内トラック
〔3グループ〕ライバル走	○ トラックを全力で走る。 ○ 半周，前の人が走ったところで，次の人がスタート。	○ 各学級身長順に4～6人ずつ横に並んでスタート	○ 内トラック1周を10m減らし，100m
〔4グループ〕リレーおにごっこ	○ 外トラック半周をバトンパスをしながら走る。 ○ 相手チームの反対側から，スタートし，相手チームの友達を，トラックを走りながら追いかけてつかまえる。	○ 3，4，5年生混合の2チーム	○ 外トラック
〔5グループ〕チームリレー	○ 3年生と5年生は，1周差を付けてスタート。 ○ 一人ずつ1周走って，バトンパスをする。	○ 3年生対4年生対5年生 ○ 各学級2チーム	○ 内トラック

【資料 17　各グループの事前の考え】

〔考察〕
活動Ⅰの実践のよさを価値付けし，他学年の結果を提示して議題化したことで，「下級生とも一緒に練習したい。どの学級も勝てるようにしたい。」という思いや願いを強くすることができた。また，下級生に採ったアンケート結果を示すことで，下級生の思いや願いを踏まえて活動すること，学校のために活動することという目的意識をもつことができた。

(Ⅰ) 活動Ⅱ（学級会Ⅱ）

〔ねらい〕

目的性，協同性，現実性の観点を基に問題点を見付け，各取組をよりよくする考えを見いだして「３，４年生とどのように取り組んでいくか。」を集団決定する。

も：みんなの心身が鍛えられ，走力を高めることができるか。〔目的性〕
み：みんなが参加し，協力しながらできるか。〔協同性〕
じ：みんなが無理なく続けることができるか。〔現実性〕

〔三つの観点〕

【資料 18　学級会Ⅱの活動過程と板書】

資料 18 のような活動過程の下，フリー，全体の話合いができるような活動形態をつくり，取組の方法について話し合った。まず，フリーでの話合いにおいて，各グループの取組方法について，質問や問題点がないかを確認させた。次の全体での話合いで，取組の一つ，「けいどろ」グループに対して，「各学年の動きが分からない。」という質問が出た。そこで，「けいどろ」グループの子どもたちは，各学年の動きについて，試しの活動をしながら説明していた。その中で，「３，４年生のアンケートにバトンパスの練習をしたいとあったので，けいどろの中にバトンパスを入れた。」と，下級生の思いや願いを踏まえた理由を付けていた。その後の問題点や改善案の話合いでも，下級生のことを思いやったり，三つの観点から根拠を示したりしながら，問題点を指摘し，よりよい方法を考えて集団決定していた（資料 19，20）。

児①：「チームリレー」は，学年でしていたら，他の学年と協力することができないと思います。
児②：「けいどろ」と「エンドレスリレー」は，「じ」のみんなが無理なく続けられるかということに当てはまらないと思います。
理由は，走り続けるからきついからです。
児③：「ライバル走」に問題点があると思います。理由は，走る人数が4～6人なら，休む時間が長くなるから，「も」のみんなが走力を高めたり鍛えたりすることができなくなると思います。
児④：「ライバル走」は，4～6人ならば時間がかかってみんなが参加できなくなり，「み」に当てはまらなくなると思います。
児⑤：「けいどろ」は，ずっと走り続けることになるから，3年生の○○さんが，足が弱いので，「み」のみんなが参加して協力することができなくなると思います。
司会：「チームリレー」の「学年でしたら，協力できない。」という問題点について意見はありませんか。
児⑥：チームを学年ではなく，3，4，5年生を合わせて，学級ごとのチームにすれば協力できていいと思います。

司会：「けいどろ」の問題点について，よりよい考えはありませんか。
児⑥：内トラックは歩いて，それ以外は走るようにするといいと思います。
児⑦：3，4年生のアンケートでは，「きつい練習もがんばれる。」という意見だったので，走り続けるのは大丈夫だと思います。
児⑧：○○さんが足が弱いということだったので，応援をするといいと思います。応援も協力したり参加したりすることになるので，いいと思います。
児⑨：内トラックで歩いていいことにすると，ずっとそこにいる人も出るかもしれないので秒数を決めたらいいと思います。そして，○○さんは，他の人よりも，歩く秒数を少し長くするといいと思います。

【資料 19　全体の話合いでの子どもの発言】

	方法	チーム	場所
〔1グループ〕けいどろ	○ 3年生と4年生がバトンを渡しながらにげる。 ○ 5年生（鬼）がバトンを取りに行く。 ○ はさみうちはなし。 ○ 3年生の［　　］さんは，応援をするか，休憩していい時間を増やす。 →［　　］さんに聞いてみる。	○ 3，4年生のクラスが同じ同士がチーム	○ 運動場全部（内トラックは，歩いていい。）
〔2グループ〕エンドレスリレー	○ 時間いっぱい，バトンパスをしながらチームで走り続ける。	○ 3年生対4年生対5年生	○ 内トラック
〔3グループ〕ライバル走	○ トラックを全力で走る。 ○ 半周，前の人が走ったところで，次の人がスタート。 ○ 全力足踏みを10回してスタート。	○ 各学年で7～8人ずつ横に並んでスタート	○ 内トラック1周を10m減らし，100m ○ 外周，50m走のレーン
〔4グループ〕リレーおにごっこ	○ 外トラック半周をバトンパスをしながら走る。 ○ 相手チームの反対側から，スタートし，相手チームの友達を，トラックを走りながら追いかけてつかまえる。	○ 3，4，5年生混合の2チーム	○ 外トラック
〔5グループ〕チームリレー	○ 3年生と5年生は，1周差を付けてスタート。 ○ 一人ずつ1周走って，バトンパスをする。	○ 3，4，5年生のクラスが同じ同士でチームをつくる	○ 内トラック

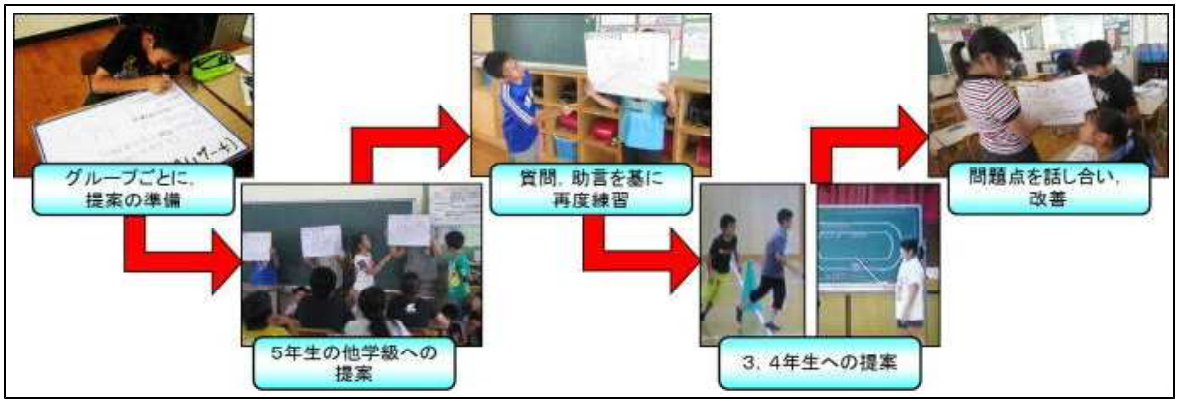
【資料 20　集団決定した取組の方法】

〔考察〕

学級会Ⅰと同じような活動過程を仕組んだことで，三つの観点から問題点を指摘し合い，改善できる考えを見いだして，取組の方法を集団決定することができた。また，事前の活動Ⅱのアンケートから，下級生の思いや願いを考えながら話し合うことができた。

(オ) 活動Ⅱ(事後の活動)

〔ねらい〕
「下級生に提案して，一緒に練習したい。」という思いや願いをもち，工夫や改善をしながら，担当した準備を積極的に行い，取組の方法を下級生に提案する。



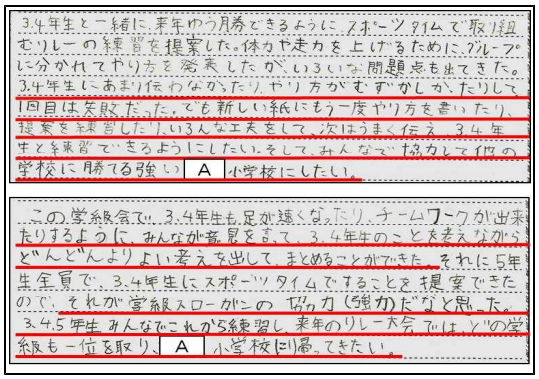
【資料 21　実践の様子】

資料 21 のように，基本グループで提案の準備をした。下級生に提案をする前に，５年生の他の学級に提案して，承認を得るようにした。他の学級への提案で，質問や意見をもらい，今の提案では伝わらないと感じ，再度，提案の仕方を話し合って練習をしていた。そのとき，言葉だけでは伝わりにくいという問題点から，動きを付けて説明するという考えが出された。そこで，子どもたちは，他の学級に協力をお願いし，５年生全員で下級生に提案するようにしていた。その後，下級生への提案を行ったが，練習方法が分かりにくい，難しい，実践できないのではないかという問題点が，下級生や先生方から出された。実践について，学級で振り返りを行うと，「もう一度，３，４年生に提案したい。」という声が上がったため，再び基本グループで改善することにした。「けいどろ」グループでは，学級会Ⅱで，「バトンパスをしながら逃げる。」ということが決まっていたが，分かりにくい，難しいという問題点が出たので，「けいどろでは，バトンパスをせず，全力で走って，走力を高めることをめあてにする。バトンパスは，他の取組で高められるから。」と考えた。そして，全体に承認を得て，準備に取り組んでいた。

〔考察〕
学級会Ⅰ，Ⅱで問題点の指摘，改善の話合いを行い，基本グループで担当する取組の準備をしたことで，「下級生と一緒に練習したい。」という思いや願いを継続させながら，下級生が分かる提案になるように，工夫や改善を重ねることができた。

(カ) 実践事例Ⅱの考察

資料 22 から，取組を提案したよさを，学級目標から感じていることが分かる。また，失敗しても再度提案することで，下級生と一緒に練習したいという思いや願いが継続していることがうかがえる。このように，よりよい考えを見いだしながら話合いができたこと，よりよい学校にしたいという意欲をもっていることからも，「情意面」「創意面」「理解面」を育てることができたと考える。


3.4年生と一緒に来年ゆう勝できるように，スポーツタイムで取り組むリレーの練習を提案した。体力や走力を上げるために，グループに分かれてやり方を考案したがいろいろな問題点も出てきた。3.4年生にあまり伝わらなかったり，やり方がむずかしかったりして1回目は失敗した。でも新しい紙にもう一度やり方を書いたり，提案を練習したりいろんな工夫をして，次はうまく伝え，3.4年生と練習できるようにしたい。そして，みんなで協力して他の学校に勝てる強い A 小学校にしたい。

この学級会で，3.4年生も足が速くなったり，チームワークが出来たりするように，みんなが意見を言って，3.4年生のことを考えながらどんどんよりよい考えを出して，まとめることができた。それに5年生全員で，3.4年生にスポーツタイムでやることを提案できたので，それが学級スローガンの協力(強力)だなと思った。3.4.5年生みんなでこれから練習し，来年のリレー大会では，どの学級も一位を取り，A 小学校に帰ってきたい。

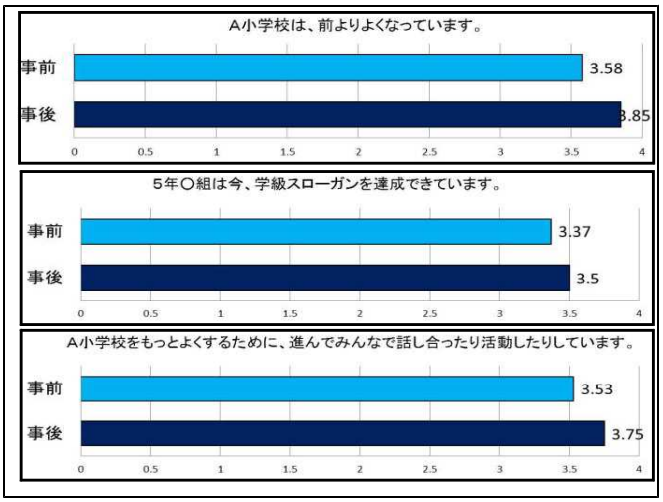
【資料 22　事後の感想】

7　全体考察

実践前後の三つの側面の変容を見取るために，アンケート調査を行った。「情意面」「創意面」「理解面」に関わるアンケート項目を立て，それらを４段階評価させ，平均値を出した。

（１）「情意面」について

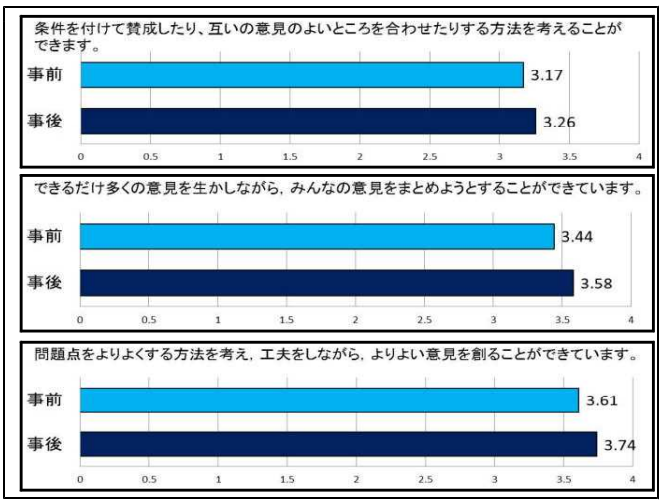
学校がよりよくなっている，学級目標を達成できているという項目が上がっていることから，子どもたちが，学級や学校生活の充実，向上を感じていることが分かる（図７上，中)。また，図７下のように，学校や学級目標の実現を目指して活動していると感じていることからも，自分たちの活動のよさを味わい，学級や学校生活の充実，向上への意欲を高めていると考えられる。



【図７　情意面に関するアンケート結果】

（２）「創意面」について

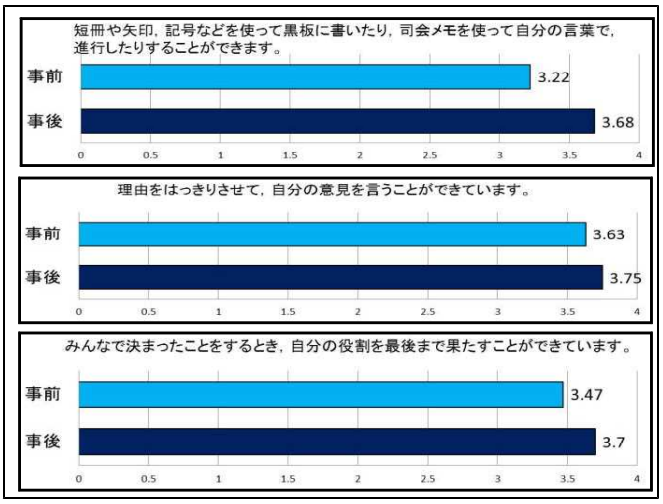
それぞれの項目が上がっていることから，折り合いを付けたり，よりよい集団決定をしたりするために，話合いや実践において，工夫をしていたことが分かる。特に，「多くの意見を生かす」「問題点をよりよくする方法を考える」の項目が 0.1 以上上がっていることから，問題点を改善するという学級会を仕組んだことが有効であったと考える（図８)。



【図８　創意面に関するアンケート結果】

（３）「理解面」について

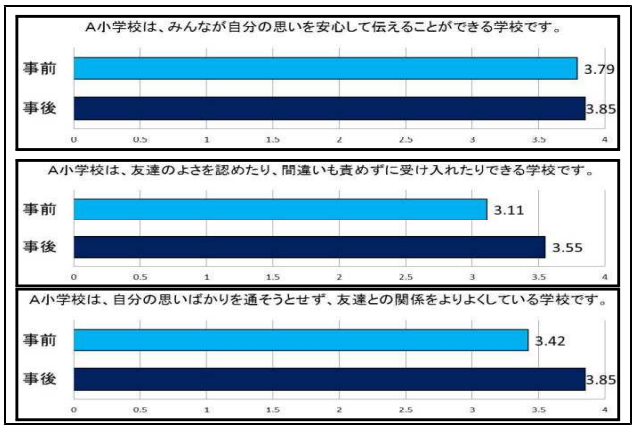
図９から，話合いや実践の手順，心構えができていることが分かる。また，「学級会は何のためにするのか。」という質問に，「学級や学校をよりよくするため」「学級スローガンを達成するため」など，学級や学校生活の充実，向上の面から記述していた子どもが，20 人中，10 人から 15 人に増えた。このことから，学級目標の実現のための活動であるという意義理解ができていると考える。



【図９　理解面に関するアンケート結果】

（４）学級や学校集団について

「５の○は楽しいです。」という項目は，事後の調査では，全員が「４（とても）」，「５の○は，学級スローガンに向かってみんなで活動に取り組んでいます。」という項目は，20 人中 19 人が「４」と回答していた。これは，実践事例Ⅰにおいて，内容の深まりをもたせた活動構成により，互いの思いを考えながら話合いや実践を行い，学級への愛着や集団のまとまりを感じたためだと考える。また，学校集団における支持的風土に関するアンケートでは，いずれの項目も上がっていた（図 10）。これらは，学級集団においても同様だった。これは，実践事例Ⅱにおいて，学級から学校という対象の広がりをもたせた活動構成により，下級生とのかかわりや下級生のことを考えた活動ができたため，学級だけでなく，学校集団の支持的風土が高まったことを感じたと考える。



【図 10　学校集団に関するアンケート結果】

以上のことから，関連した議題からなる活動Ⅰと活動Ⅱを位置付け，思いや願いを連続・発展させる活動構成を仕組んだことは，よりよい生活づくりを楽しむ子どもが育つ上で有効だったと考える。

８　成果と課題

（１）研究の成果

○　「Standing」のしかけにより，思いや願いを強くしたことは，活動への参画意欲を継続・発展させることに有効だった。また，友達や下級生の思いや願い，学級や学校の現状やよさを知ることにもなり，それらを考慮しながら話し合うことにもつながった。

○　グループ活動の配置により，一人一人に表現や準備，実践をさせたことは，役割への責任をもたせることになり，話合いや実践を活性させることに有効だった。

○　学級会の活動形態の工夫により，グループやフリー，全体での話合いをさせたことは，グループの考えや試しの活動から，問題点や改善案を見いだすことに有効だった。

○　発言の手引きにより，発言内容や方法を把握させたことは，互いが納得する根拠で考えを強化したり，互いのことを思いやった表現をしたりすることに有効だった。

（２）今後の課題

●　活動Ⅰから活動Ⅱへと子どもの意識をつなぐために，活動Ⅰの事後の活動における振り返りの活用，活動Ⅱの事前の活動における事前調査を充実させていくようにする。

●　学級会の効率化，スリム化を図るために，話し合う内容を精選し，計画委員会での活動計画を十分に行い，見通しをもたせたり，事前に互いの考えを把握させたりしておく。

＜参考文献＞

・小学校学習指導要領解説　特別活動編　　文部科学省　　東洋館出版社　2008 年
・特別活動指導資料　楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動　小学校編　国立教育政策研究所 教育課程研究センター　文溪堂　2014 年